
蒼国物語

松谷 真良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼国物語

【Nコード】

N4654BA

【作者名】

松谷 真良

【あらすじ】

魔法あり剣あり、なんでもありの世界に存在するアリア学園。そこに入学した主人公は周りの人間に振り回されつつも平穩かつ目立たない学園生活を送ろうと…するのをあきらめた。逆に自ら騒ぎを引き起こしてみたりして…。
どうするんだよ？

プロローグ

この世界は魔法で満ちている。ほとんどの人間が魔法を使うことができるし、龍が住まう異世界とも繋がっている。

空は青く晴れている。海も同じように青く澄んでいる。

これなら、何処かを視ることも出来るだろう。

この大陸には、7つの国がある。

大いなる自然があり豊かな我が国、青国リスィエル王国

隣国で機械技術の発達している赤国ファンカレイラ

青国と同盟を組んでいて仲の良く、古風残る緑国リヨクオウ。

緑国の隣国、黄国オウカは国土の半分に砂漠が広がっていて残り半分は森、という極端な国で民主制だ。

黄国の隣国で一番北の黒国ハナシは1年のうちほとんどが氷に覆われている雪国。

紫国アレタチは黒、赤国に挟まれており半年ほどを氷に覆われて過ごす。そして良く知られていないが白国ペガススというペガサスの国が有るらしい。どうもこの国は雲の上に有ると、聞く。

異世界には龍の国ドラゴニアがある。他にも闇国、根国、という国もあるとか…。

何処までも青い空を見上げ、私は気合を入れて、目の前の大きな門をくぐる。

きつと、私を「私」として見てくれる人がみつかるはず。

人と話すのは苦手だけど…。

目立たないといいな。平穏な学園生活になるといいな。

確か兄上の話によると、この学園、チームを組まないといけないみたいだけど…なんとかなるよね、きつと。

うん、成せばなるでしょ…多分。

大丈夫かな、心配になってきた…。

ばれないといいな。

私は髪をキュツと青いゴムで1つにくくり、固く決心をする。
平和で目立たない学園生活にしよう…と。

友達になる為には…？

ここはリスィエル王国、通称青の国とか青国にある全寮制の学園、アリア中学高等学校中等部にある1年3組の教室。

ついでに、今は7月。そして放課後。

「えーと、この間の任務に点数が入らないって本当？」

アリア学園には『任務』という授業制度があります。『任務』を
すると、『任務』ごとに決まっている点数が成績に加担されます。
任務次第ではテストの点数が悪くても進級出来ちゃったりとかする
んです。

さらに任務はチームを組んで行うことができます。1チーム最大4
人までで、チームを組むと寮の部屋が、当たり前だが男女別々で同
じになります。

『任務』で得られる点数は最大1,000ポイントまでつきます。

さて、声を上げた少女ですが教壇に腰掛けているかなり悪い子で
す。

少女は、半袖の白いシャツに青色のかなり大きいリボンを首に巻
いていて、水色の生地で裾の方に白い横線が入ったミニスカの下に、
白い短パンを履いている。靴下は腿くらいまでの白いもの、靴は革
靴というかなり自由な服装。この学園制服は校章さえついていれば
個人の自由なのだ。

彼女は長い銀髪をポケットから取り出した青くて細いひもで高めに
縛ってから目の前に立っている、色々な方向にハネている金髪に明
るい黄眼の身長155センチくらいの少女に、碧い瞳を向けて今聞
いた信じられない情報を確認しました。

真っ直ぐ伸びた銀髪、冷たそうな心の色を現したとか言われる碧
眼の少女はフィリア・スィエルムーン。

優等生で、魔法とか剣技とか特殊能力とか使えます。色々とパーフ

エクトです。

ある部分を除いて、ですけど。

彼女は友達がおっそろしいほどまでにいません。と言つか、皆無です。

今、話しているライラ・クレイクだって、友達ではない。ライラが一方的に纏わりついてくるので仕方なく付き合っているだけの話。前回の任務だって2人いないと行えなかったので仕方なくライラとやってみただけ。

そんなことをしていたら、ついたあだ名が『一匹銀狼』。

彼女の歳は13歳で7月7日生まれ。

成績の方は5段階評価——特待生、3つ星、2つ星、1つ星、星なし——のなかで、トップの特待生。これも友達がいないのに輪をかけています。

で、そんなフィリアが付き合っている唯一の人間と言っちゃっても嘘にはならないのは、ライラ・クレイク。

彼女も同じく13歳の特待生。

平均より高い能力で、野性的な勘を備えた人。7月8日生まれで、フィリアと一日差。運動神経抜群で、50m走3秒。ちなみにフィリアは5秒。

結構フレンドリーで、誰とでもすぐに友達になる。この特技(?)のお蔭で、フィリアと話してる唯一の希少人間となっている。趣味は嫌がるフィリアから、無理矢理本を借りること。

「いいじゃん、いいじゃん。気にすんな」

「それもそうだね。じゃあ、また明日」

ライラに言われてすぐうなずいたフィリアは確かに冷たいのかもしれない。

トンつと教壇から、降りると教室を横切って自室に帰っちゃいました。

「ちえ！つゝまゝんゝなゝいゝ！！……じゃゝ、しよーがないから帰るか」

ライラも帰りました。

―夕食時―

「いっただっきまゝす！」

ライラは友達のセノーテとソフィーと夕食を食堂で食べています。
4人がけ机で。

「ん、でね。今日は」

今日のことを色々話しながら食べています。

セノーテは下のほうがグルグル巻きになっている緑髪に緑眼で、ソフィーは少し明るい茶髪茶眼の2人とも150センチ周辺です。

「今日のフィリアさん、凄かったね！だって、罰則担当のボクワ先生を素手で倒しちゃうんだもの！私、ビックリした！」

そんなことをソフィーが感激顔で言った時、ふと顔を上げたライラはフィリアが疲れた顔でお盆を持ち向こうを歩いているのを見つける。

「あ…。噂をすれば、なんとやらだ。おい、フィリア！」

ライラが叫ぶと律儀にも彼女はやって来た。

「…何か？」

「もうご飯食べたの？食べてないんなら、一緒に食べよ！」

「見ればわかるんじゃないの？まあ、別にいいけど…その2人は迷惑じゃない？」

「まっさかあ！ね、セノーテ、ソフィー？」

ライラが楽しげに笑いながら2人へ聞いたけれど、その瞳には迷惑とかいったらぶっ飛ばす的な光が宿っていた。

「じゃあ…」

フィリアは丁度ライラの隣が空いていたのでそこに座る。

「それ、なあに？」

彼女が持ってきた、何の肉だかわからないがステーキのような料理にセノーテが興味深々で問いかける。

「さあ…？良く分からない。…兄さんが持ってきたから…」

「嘘お！フィリアさん、お兄さんいたの！？しかもこの学校！？」
今度はソフィーが食いついた。

「いや…別に、どこにでもいる普通の人だし…」

フィリアが気まずそうに視線を伏せて、ご飯を食べ始める。

「す、すっごい綺麗に食べるね。何処のお嬢さま！？って感じ」

セノーテがそれを見て隣のソフィーに小声で話しかけた。

「あ、あれ2年3組のライさんだ！相変わらず、カッコいいなあ！」

しかしソフィーはセノーテの言葉を全然聞いていず、フィリアの背後から音を立てずにそっと近づいてきた金髪蒼眼の160センチくらいの男子をうつとりと眺めた。

そしてそれを聞いたフィリアはバツと立ち上がると、ライに向かって拳を振り上げる。

「フィ、フィリア？！ちょ、な、何して…」

焦ったのはライラ達3人。

彼女の拳は、ライが一步足を後ろに引いて避けた為、3人の予想に反して彼には当たらず空を切る。

そして彼は楽しそうにフィリアへ笑いかけながら告げた。

「まだ俺の方が強いな。体がなまってんじゃないのか？学園入ってから、サボっているだろう？」

「ム…」

フィリアは悔しそうに椅子に座りなおした。

「大体、俺の接近に気付かなかっただろ？甘いな」

「兄上が強すぎるんです。っていうかこのご飯は何ですか？不思議な味がするんですが…」

彼女がボソツと最後の足掻きのように呟いた言葉はライラ達3人を驚かせるだけだった。

「え！ライさんの、妹！」

「と言うか、普通の人じゃないし…」

「うーん、仲ご飯おいしそうだなあ」

「「そういうこと今言わないで！」」

ライラが呟いた言葉にセノーテとソフィーが同時にツツコミを入れる。

「人に夕食をとって来るよう頼むのが悪いんだ。…ああ、そうそう。これをやれだつてさ。誰かと一緒にチーム組んでだとか」

ライはポケットからとりだした任務内容が書かれている紙をフィリアに渡す。

「はい…」

それをフィリアが嫌そうに受け取るのを確認するとライはニヤツと笑う。

「じゃ、俺はここで。友達は大切にしるよ？」

「兄上にだけは言われたくない…」

再びフィリアが呟く。

「フィリアよりはましだ。それじゃあな」

ライは屈みこみ、フィリアの耳元で囁いてから食堂を出て行った。

「か、カッコいい！あんな人がお兄さんだなんて羨ましいなあ！しかも、兄上って呼んでるの？凄いね！何処から来たの？って感じ！」
ソフィーがフィリアの手を取りブンブン振って興奮しつつ叫ぶ。

「あ、それでさ、その任務なんて書いてあるの？」

「え…いや、内緒」

興味深々で聞いてきたライラからフィリアは慌てて紙を遠ざける。

「えっと、何々？『青の国王宮に行つて、国王様から任務を聞いてこい。同行者、チームの1名必須』…凄いじゃん！これ、1年生が受けられるような任務じゃないよ！」

が、セノーテに奪われ音読された。

「えっ、じゃあ、私一緒にやりたい！」

ライラは彼女の言葉を聞いて嫌そうな顔になったフィリアの腕をつかむ。

「……………」

「いいよね？うわぁーいい！やったあ！」

「嫌だ」

勝手に決めて、返事もしていないのに、喜んでいるライラを見てフィリアは短く言う。

「でも！1人必要なんでしょ？誰とやるの？」

「こんな任務やる訳ないでしょ。くだらないじゃない。王様なんて…。ごちそうさま。それじゃ、また明日」

かたんと椅子を引いて席を立ったフィリアは任務内容が書かれている紙ゴミ箱へ捨てようとする。

「あゝ！！だめ！一緒にやろうよ！」

ライラが大声を出してフィリアを止める。

「私はあなたとチームを組む気もないし、任務もしたくないの。分かった？」

叫んだライラへ一線を引くように、静かに拒絶したフィリアへ彼女は、その線をもっともせずに踏み越えて言い切る。

「これは決定事項だから変えることはできません！残念でしたー！」

ライラは啞然としているフィリアから紙を奪い取って紙の最後の欄へ署名した。

「はあ？つてちょっと！それどうする気なの！」

「先生に持つて行って、フィリアと一緒にやりますって言うんだよ。決まってるでしょ」

「だから嫌だつて…」

ライラはなおも言い募ろうとしたフィリアを遮って行った。

「ほお、フィリアはライさんが言っていたことなのにサボれるんだ。凄い凄い！」

「…分かった。しょうがないからチームを組んであげる。でも、これだけは言っておくから。足手まといにはならないで」

こうしてフィリアはライラと同じチームになりました。

とても険悪なムードが漂っているけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4654ba/>

蒼国物語

2012年1月12日21時48分発行